



# IUFRO-J NEWS

No. 44 (1991.11)

## BIO-REFOR プロジェクト・ワークショップの 開催について

熱帯林の急激な減少が地球環境のみならず開発途上国の人々の生活にも深刻な影響を及ぼしていることから、東南アジア地域の熱帯林を再生させるべく本年3月にインドネシアのボゴールにおいて IUFRO-SPDC, IUFRO-Japan の主催により東南アジア・太平洋地域8ヶ国の研究者が参加して「フタバガキ科樹木による東南アジア地域の熱帯林再生」プレ・ワークショップが開かれました。この集会では「早期に各国が協力して研究活動を開始し、熱帯林再生のための造林技術を緊急に確立する必要がある」ということが確認され、これを BIO-REFOR (バイオ・リフォール, Biotechnology Assisted Reforestation の略称) プロジェクトとして発展させることになりました。

これを受けて来年5月に日本(つくば市)でフタバガキ科樹木の造林、菌根菌、増殖に関係している世界の研究者を集めて本格的なワークショップを下記の日程で開催することになりましたのでお知らせします。IUFRO-J 加盟機関には近く詳細をご案内しますが、多数のご参加をお待ちしています。

### 記

- 日 時 1992年5月19日(火)～5月21日(木)
- テ マ 「フタバガキ科樹木の種生態と増殖について」  
(フタバガキ科樹木に関する生態および菌根菌のデータ・レビュー、増殖技術に関する研究手法)
- 開 催 場 所 つくば市ノバホール
- 主 催 IUFRO-SPDC, IUFRO-Japan
- 問い合わせ先 BIO-REFOR 事務局長 河原輝彦  
茨城県稲敷郡茎崎町松の里1 森林総合研究所 (IUFRO-J 事務局内)  
TEL (0298) 73-3211 内線 248

## IUFRO-SPDC プレ・ワークショップ「フタバガキ科樹種の 菌根菌と増殖に関する研究の現状と問題」に参加して

森林総合研究所 横田 明彦

本年3月26日から28日まで3日間、インドネシア共和国ボゴール農科大学で開催された IUFRO-SPDC ワークショップ「フタバガキ科樹種の菌根菌と増殖に関する研究の現状と問題」に参加する機会を得たので概要を報告する。

今回のワークショップは開催国を含む9ヶ国(インドネシア、日本、フィリピン、台湾、マレーシア、タイ、バプア・ニューギニア、スリランカ、オーストリア)17名が参加して行われた。ワークショップ開催直前まで、ミャンマー、ベトナム、中華人民共和国の研究者も参加を強く希望していたが、難しい国情のため結局不参加となってしまった。25日夕刻までにジャカルタ・プレジデントホテルにチェックインした17名の参加者は、早速夕食を共にしながら自己紹介や研究情報の交換などを行い、本番前から早くも白熱した議論があちこちで繰り広げられた。

ワークショップ第1日目;26日朝、怪しい天候の中、参加者全員貸し切りバスでジャカルタをたち、快適なドライブを楽しみながら1時間半程で会場のある古都ボゴールに到着した。先にホテルにチェックインし荷物を軽くした後、会場であるボゴール農科大学に向かった。会場には大学の講義室が当てられ、室内は学生や職員の協力で花壇が設けられきれいに飾り付けされていた。

ワークショップは午前10時過ぎオープニング・セレモニーで始められた。まず、日本の外務省を代表して在ジャカルタ日本大使館瀬戸書記官(林野庁から出向中)、次いで前 IUFRO-SPDC コーディネーターの Oscar Fugalli 氏、それからボゴール農科大学学長 Dr. Sitana Arsyad 諸氏が祝辞を述べた後、ボゴール農科大学名誉教授 Hadi 氏の司会により「フタバガキ科樹種の菌根菌と増殖に関する研究の現状と問題」という題目で各国代表者によるカントリーレポートの発表に移った。

その内容を以下に簡単に紹介する。①日本の小川眞氏は「Macorrhizal Research in Japan (日本における菌根菌研究)」というタイトルで、日本での菌根菌研究の歴史を紹介すると共に、東カリマンタンで行っている JICA 林業プロジェクトでの研究成果として、日本のクリ林などの広葉樹林に発生するきのこがフタバガ

キ科林に発生するものと類似していることや、その生態的特徴、菌を接種した苗の生長促進効果などについて報告した。②フィリピンの Dr. Reynald E. de la Cruz 氏は「Status of Bio-reforestation in the Philippines (フィリピンにおけるバイオ造林(微生物を利用した造林)の現状)」というタイトルで、外生菌根菌及び VA 菌根菌が Bio-fertilizer として既に商業化されており、これらを使って荒地地にフタバガキ科の裸苗を植栽する技術の開発や組織培養により増殖したフタバガキ科の苗への効果的な菌根接種方法について研究中であることを報告した。③インドネシアからは Dr. Suhardi 氏が「Status of Mycorrhiza Research on Dipterocarps in Indonesia (インドネシアにおけるフタバガキ科樹種の菌根菌研究の現状)」というタイトルで、菌根菌の種類によるフタバガキ科樹種の生長促進効果の違いに関する研究について報告した。④マレーシアの Lee Su See 女史は「Some Views on Dipterocarp Mycorrhiza Research (フタバガキ科樹種の菌根菌研究に関する概観)」というタイトルで、マレーシアのフタバガキ科樹種の菌根菌研究について報告するとともに、今まで菌根菌について通説とされてきた事が本当に正しいのかどうか、視点を変えて研究し確認する必要性があるのではないか、という問題提起をし注目された。このほか、⑤フィリピンの Mitzi Pollisco 女史は「Ecology and Propagation of the Philippine Dipterocarps (フィリピンのフタバガキ科樹種の生態と増殖)」というタイトルで、⑥タイの Dr. Uthaiwan Sangwanit 女史は「Ectomycorrhizae of *Dipterocarpus alatus* Roxb. (*Dipterocarpus alatus* の外生菌根)」というタイトルで、⑦同じくタイの Dr. Ladawan Atipanumpai 女史は「Status of Research on Dipterocarps in Thailand (タイにおけるフタバガキ科樹種の研究の現状)」というタイトルで、⑧スリ・ランカの Dr. K. Abeyanake 女史は「Mycorrhizal Research in Sri Lanka with particular reference to work on mycorrhizae of Dipterocarpaceae (スリ・ランカにおける菌根菌研究(特にフタバガキ科樹種に関して)」というタイトルで、また、⑨マレーシアの Dr. Appanah

は20年以上にわたるフタバガキ科樹種の造林経験からフタバガキ科の種生態について報告し、第一日はカンントリー・レポートの発表と若干の質問だけで終了した。

第2日；27日はエクスカージョンで、ボゴール近郊のフタバガキ科林を視察した。午前中はボゴールから約60 kmの山岳地（といっても標高はわずか250 m）にある HAURBENTES 試験地でフタバガキ科の天然林や苗畑を見学した。

ここでちょっとしたハプニングがあった。幹線道から分れてこの試験地へ入る道の入口にゲートがあり、我々の乗った大型バスがかろうじて通れるだけの幅はあった。しかし、ゲートのポールが途中までしか開かなかったため、ここでバスを降りて数キロの山道を歩いて行くことになった。幸いにも少し歩いたところで先に到着していた車と出会い、これに参加者を分乗して運び事なきを得たが、計算外のトラブルに責任者の Fakuvara 教授の



写真-1 ワークショップ会場



写真-2 DRAMAGA 展示林

慌て様は見ている気の毒であった。

今年は幸運にもフタバガキ科の種子の豊作年にあたったので、試験地でいろいろな形の種子を見る事が出来た。苗畑では付近の山から採ってきたばかりのフタバガキ科の山採り苗（1カ月半生）をポットに移植していたが、根にはまだ菌根が着いていなかった。養苗している場所はカリビアマツの林間にあり、マツとフタバガキでは着く菌根菌が異なるため、この方法ではフタバガキの苗に菌根を自然感染によって着けることは難しいと思われた。

午後は再び市内に戻り、大学の近くにある DRAMAGA 展示林を見学した。この展示林で最も古いものは約35年前に作られ、現在までに39科122樹種（うち外来種46種）が植栽されている。大きいものは樹高20 mを越える立派な木になっており、林床には1 m程に生長した稚樹がびっしり生えて二段林になっていた。

最終日（28日）は第1日の報告を基に今後の研究活動計画について意見交換をした。なかでも多くの参加者が、熱帯林の菌根菌研究及び熱帯林の在来樹種の増殖研究の重要性・緊急性を指摘し、また効率的に研究を進めるために東南アジア地域内での多国間共同研究の実現に強い関心を示した。

さらに、これらの研究に早期に着手するため、例えば菌根菌研究の最大のネックであるきのこ分類学者（開発途上国には皆無）の先進国からの派遣、実体顕微鏡や電子顕微鏡などの研究機材の整備、菌の分離培養や組織培養もできる研究環境の充実等に先進諸国の援助を要請する必要があること、研究内容においても菌根菌の生態的特徴など新たな分野の研究にも着手する必要があること、効率的な研究を進めるために東南アジア諸国間の研究情報ネットワークの整備の必要性も指摘された。さらに、これらの多国間共同研究実施のため先進国、特に日本の協力に期待する旨の発言が多く出された。

今後の研究活動計画については、ワークショップに参加できなかった国からの要望も加え個別にプロポーザルを提出してもらい、カンントリー・レポートと併せてプロシーディングスを出版することになった。

また、「東南アジア地域の熱帯林の再生」のための課題である、種子によらない苗の大量増殖技術、フタバガキ科樹種と共生する有用な菌根菌の大量増殖技術及び菌接種技術の確立のため、世界（アジア・オセアニア、ヨーロッパ、北米など）から熱帯林の菌根菌及びフタバガキ科樹種の増殖に関係する研究者を集め、本格的なワークショップを1992年5月に日本で開催することが満場一致で決定された。

最後に、今回のワークショップを企画・運営した



写真-3 HAURBENTES 試験地-苗畑



写真-4 記念撮影

IUFRO-SPDC, IUFRO-Japan. 資金拠出した日本国政府及びホスト機関であるボゴール大学関係者に対し参加者全員から謝辞が贈られ閉会した。

IUFRO-SPDC プレ・ワークショップ出席者

Austria Mr. Oscar Fugalli (IUFRO-SPDC Secretariat)

Japan Dr. Makoto Ogawa (FFPRI)  
Dr. Kazuo Suzuki (Tokyo University)

Dr. Seiichi Ohta (FFPRI)  
Mr. Akihiko Yokota (FFPRI)

Taiwan Dr. Hsu-Ho Chung (Taiwan Forest Research Institute)

Philippines Dr. Reynald E. de la Cruz (University of The Philippines)  
Ms. Mitzi T. Pollisco (Ecosystems

Research and Development Bureau)

Malaysia Dr. S. Appanah (FRIM)

Ms. Lee Su See (FRIM)

Thailand Dr. Uthaiwan Sangwanit  
(Kasetsart University)

Dr. Ladawan Atipanumpai  
(Kasetsart University)

Sri Lanka Dr. Kanty Abeynayake (University of Colombo)

P.N.G. Mr. Sam Nalish (Forest Research Institute)

Indonesia Dr. Soetrisno Hadi (IPB)

Dr. Yahya Fakuara (IPB)

Dr. Suhardi (Gadjah Mada University)

Dr. Ika Rochdjatun (Brawijaya University)

### “1992 カラマツ学会”

—カラマツ森林の生態と管理, 明日を目指して—をテーマに US Forest Service はじめ, 米・加7機関と IUFRO が後援する研究集会が開かれる。会議の前後に旅行あり。

日程: 1992年10月5日~9日

場所: Grous Mountain Lodge, Whitefish,  
Montand U.S.A

世界のカラマツ森林の ecological processes and

physical and biological factor に係るすべての研究会野についての論文とポスターを募集。参加申込みは 1992. 1. 1 まで下記へ。

Center for Continuing Education

The University of Montand Missould. MT  
59812-1900

以上の案内が森林総研, 三上進氏のもとに寄せられました。  
(ユフロ-J事務局)

## ユ フ ロ の 歴 史 (IV)

— 日本大会とその前後〈1974~1981〉 —

大日本山林会 松井光瑠

## 1. 日本開催決定まで

日本大会へ向けて、日本国内での動きが始まるのは、1972年の第7回世界林業会議（ブエノス アイレス）の際の福田林野庁長官・竹原林試場長・佐藤東大教授とユフロ会長 Samset 氏との会談後、帰国した竹原林試場長が早速、林野庁長官あてに、文書をもって第17回ユフロ大会の日本開催についての指示を求めた時からと思う。日本開催の可否、可能性等については、林試、大学を含めて、時折話題になったが、心情的には開催すべき時期に来ていると云う意見が多かったものの、具体的な実行力には不安が残った。Samset 氏の熱心な要請を受けた竹原氏は、この国家的行事は、林野庁の全面的バックアップ無くしては成功しないと考え、先づは林野庁の意向打診となったものと思われる。林野庁では早速、検討委員会を設けている。福田氏以後の林野庁長官は、代々ユフロの動きについての情報を受け継ぐことになる。

1974年になり、ユフロ会長 Samset 氏より林野庁長官あてに、当年のユフロ理事会に関係者出席の招待がなされ、林試の松井が出席することとなった。当時理事であった佐藤氏と共にウィーンに赴き、国際組織についての手ほどきを受けることになる。ユフロの常置事務局は、オーストリー政府の好意により、同国林業試験場に置くことが既に決っていたが、この理事会に際し、オーストリー林試場長よりサムセット会長に事務室の鍵を渡すセレモニーが行われたのが印象に残る。

以後の理事会には、日本から佐藤氏と松井が毎回出席することになり、ユフロと云う国際組織の運営の実体を知るのに役立った。当時は、研究集会に参加する人も少なく、国際的な研究活動に関する情報は少なかつた。理事会に複数で常時出席出来たことは、日本での大会を準備する上では有難いことであった。

1976年6月の第16回大会（オスロ）において次期開催国として日本が指名されることは、ほぼ確実な情勢となっていたし、その事は、ユフロ日本委員会にも逐一報告されていたので、ユフロ大会の実態を少しでも多くのメンバーに経験してもらうため、団体旅行を組織すると

ともに、Samset 会長の了解を得て、数名の有志に先発してもらい、ノルウェーの組織委員会の内部に入り、大会運営の実態の勉強に当ててもらった。一方、評議員（International Council）に出席した松井は、次期開催地が日本に決定すれば、これを歓迎する旨の林野庁長官のメッセージを持参、被露し、万場一致で日本開催が決定した。

1977年1月から次期大会までの理事会メンバーは、W. Liese 会長（ドイツ）佐藤大七郎副会長のもとに編成され、次期大会準備のため松井が常任オブザーバーに指名された。その他、各研究グループ等のリーダーに多くの日本人科学者の名が挙げられた。

## 2. 日本での準備始動

ユフロ新理事会は任期の開始早々、1977年2月にナイジェリアで第1回理事会を開催、同年10月、カナダで行われた第2回理事会では、日本大会の準備状況が議題になった。

日本でも早速、ユフロ-Jにおいて、オスロ大会で得られた情報や経験を集約するとともに、情報連絡のため、ユフロ-J ニュースが1977年より発刊された。

一方、林野庁においても、1972年の世界林業会議以来の経緯を踏まえて林野、林試関係者により、大会運営、組織体制、財政問題等についての検討会が1977年2月に行われ、次いで、7月には林野庁と林試を中心に、組織委員会及びその事務局が発足している。8月には、林野庁長官が林業協会会長に対し、協力依頼をするとともに、組織委員会において、予算案及び資金調達方法についての論議を開始し、全体構想が検討されている。

時あたかも、経済は低成長時代にあり、資金調達は非常に困難であることが、各方面から指摘され、絶大な努力が求められる状況であった。

そのため、林野庁内組織委員会、林業協会では度々協議が繰返され、また佐藤、松井を通じて理事会側との情報交換が行われた。ユフロ-J事務局も、J・ニュースを通じて会員への情報連絡に努めるとともに、ユフロ大会での恒例となっているエクスカーションの候補地選び、コース選びが進められて行った。

3. 組織委員会の活動

林野庁を中心にした素速い動きにより、日本大会準備の全体構想が徐々に固まり、1979年4月7日、東京農工大学を会場に、ユフロ第17回世界大会組織委員会が発足する運びになった。これは、日本大会の開催・運営、残務処理など一切の業務を審議決定する最高機関とし、その構成は、日本林学会、日本木材学会、およびユフロ加盟の大学、研究機関ならびに林業関係団体等の41名より成る。会の任務代行のための幹事会が置かれ、日常業務の効率化を計り、また募金活動を行なうための募金委員会と、決定事項を実行する運営委員会が設けられ、運営委員会は、総務、研究、エキスカージョンの3部会で構成されている。

同じく4月23日には資金調達を支援するための協力会が林業団体をメンバーとし発足し、柴田栄日本林業協会長が会長となった。

これ等組織図は図-1の通りである。

3-1 募金活動について

最大の問題は資金であった。オスロ大会の実態調査をもとに必要な経費を概算すると、約2億円を必要とすることが解った。そこで、ユフロ・メンバーが可能な限り拠出し、次いで林業関係団体の寄附をお願いし、足らざる所を広く経済団体に応援して頂く方針を建て、それぞれの努力目標を設定した。

特に多額の寄附をお願いする団体に対しては、免税措置が必要になるので、公益法人である日本学術振興会に依頼し、募金及び経理事務をお願いすることとし、その申請をするとともに、大蔵大臣へ指定寄付申請を依頼することとした。

募金は、協力会による経団連を始めとする各団体への呼びかけ、林野庁を通じた地方自治体への協力要請、ユ

フロ-J事務局を通じた大学等メンバー機関での活動等、作成された募金趣意書を基に幅広く展開された。寄付にはユフロに対する充分の理解が前提となるから、募金委員会メンバーは、繰返し繰返し訪問、説明が重ねられた。全国的な活動により、次第に盛り上がりが見られる様になって行った。

3-2 運営委員会の活動

運営委員会の委員長は、当時の林試調査部長土井恭次氏が当った。事務局となった林試では多くの人が動員され、最後の一年間は相当の重労働となった。この様な苦勞は主催国の研究機関に共通する。研究者にこんな雑務をしてもらうことは誠に心苦しかったが、やっているうちに、人間には思いがけない素晴らしい能力のあることが解った。大会運営のために造られた100ページを超える運営マニュアルには、新しい試みが盛り込まれ、緻密な研究計画書を思わせる。これ等の人々が、大会後勝れた研究者として飛躍して行ったことを知り、陰ながら喜んでる。

大会会場の選定は、東京、京都、筑波の中から、宿泊、会議室数、交通の便等を調査の結果、京都国際会議場と決定された。

開催期日は、各国の大学の休となる8月が強く要望されたが、京都の夏の暑さ等から1981年9月6~12日とし、続いて3~5日のエキスカージョンのコース14を設定することとなった。

運営委員の仕事は、理事会の審議と連動する。ユフロ大会は規約に定められたユフロの行事であり、大会の大綱はユフロ理事会で決定され、主催者はユフロ会長である。主催国はこれを設営する任務を持つ。しかし、主催国にもメリットはある。その1つは、世界の勝れた研究者達が一齐に來会し、主催国の多くの研究者や林業関係者が、居ながらにして、これ等の人々と面識を得、意見

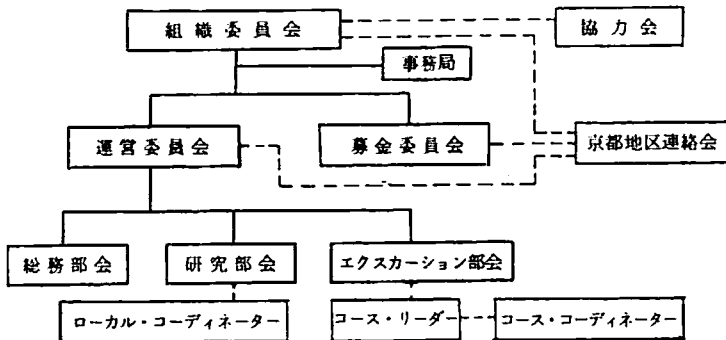


図-1 京都大会運営組織図

を交換できる絶好の機会であること、また、特に日本の場合は海外に殆んど知られていない日本の林業の実態や研究業績についての認識を改めてもらう好い機会になることである。

主催国の趣向も勿論、理事会に反映させることも必要である。大会シンボル・テーマも広く国内から募集され、得られた多くの候補テーマを中心に理事会でまとめられた。"Research Today for Tomorrow's Forests"であった。

官庁の後援名義もユフロ大会の性格上重要であると考えられた。申請の結果、農林水産省、林野庁、学術会議、科学技術庁、外務省、文部省より後援の承認を得た。ここで、外務省については、参加国が多く、国際政治上配慮を要する国も皆無ではなかったので、外務省の御指導、御協力を得たいと考えた。台湾の国名呼称については、Liese 会長の北京訪問、佐藤副会長の台北訪問により、双方の理解を取りつけ、China のもとに、それぞれのメンバー機関名を記すこととした。

組織委員会事務局の仕事量は増加の一途をたどり、1980年には事務局には、総括事務担当、予算班、経理班、募金事務担当、特別接遇班、京都地区連絡会が、また、総務部会には、総括事務担当、広報班、登録班、設営班、プログラム班、インフォメーション班、宿泊輸送班、社交班、式典班、レディスプログラム班、京都社交班が作られていた。勿論、研究者のみならず、事務職員も動員された。

### 3-2-1 研究部会

ユフロ大会では開会式等全体会議と、6ある研究部会の部会々議、及び、Subject group, Project group, Working party それぞれの研究集会、さらに、これ等が合同で行われる合同研究会などが行われるのが普通である。部毎に研究集会の数とテーマが集約され、理事会で部間の調整が行われ決定される。京都大会では会議場の規模は予め示してあったので、研究集会数は133と決まった。

事務局では、これに対応した会場の割り振り、日本側の各集会担当者、補助者、必要機器類の準備が進められた。同時に各部の日本側責任者も決められた。

日本大会で始めて採用されることになった、ポスター発表は、経験が少なく、ポスターの規準や実行要領の作成と、その衆知法には苦勞した。しかし、外国語での発表に自信のない日本人には便利な発表法なので、日本人の参加を呼びかけ、結果として好評を得た。以後の大会からは盛んに用いられるようになっている。

### 3-2-2 エキスカーション部会

ユフロ-J事務局で既に見学候補地が選ばれていたものにつき、一般、専門別にコース編成の仮案を作り、営林局、都道府県の係官の御協力を得ながら、リアルタイムで、輸送、現地説明、食事、宿泊、懇親会等運行の実地調査を行ない、修正しつつコース毎の最終案内書を作成した。準備が進むにつれて、現地側の盛り上がりによる追加事項が増え、調整には時間を要した。民有林関係見学地については、普及事業の一環として、既に展示林の案内板設置や説明 data の整理が進められていたので、これが非常に役に立った。目に見えない、心からの応援を頂いたわけである。

林学のようにフィールド研究が必要な分野では、エキスカーションによる現地討議は極めて重要で日本人研究者にも多く参加して欲しいわけだが、外国人参加希望者が予想を上廻った。各コースのリーダーには、その専門毎に著名な先生方をお願いするとともに、数名ずつの専門研究者を配し、活発な討論を期待した。運行は、全面的に日本交通公社に依託したが、英語に堪能なバスガイドを付すると共に、コース・リーダーの補佐には英語の話せる中堅研究者や林業技術者の応援をお願いした。

旅行期間中は、京都に連絡事務所を設け、万一の事故対策に備えた。

## 4. 理事会の動き

その後第3回理事会は、予定されたイランが開催不能となったため、ドイツのミュンヘンで1978年10月に行われた。ここで、日本大会の日程が決定されるとともに、大会のシンボルテーマが決まった。

第4回は1979年9月、英国エディンバラで開催、林野庁として招待され出席した猪野曠指導部長も交じえ、日本の組織委員会の活動状況、大会運営の全貌を説明した。ポスターセッションについては期待が大きいととも、その要領を早く作り衆知することが求められた。

大会の研究プログラムについては、Samset 氏を長に、各部会長と松井がメンバーとなり研究集会 (Congress group) のテーマを調整し、次回理事会で決定すること。

大会参加のための経費見積り、特にエキスカーション費用を早く知りたいとの希望が強く出された。

第5回理事会は、1980年9月、ソ連で開催。

今回から組織委員会事務局の浅川澄彦氏が出席することとなり、理事会との連絡の強化が計られた。

ここでは、組織委員会で作成した会員配布用の大会説明書の最終案が修正決定された。大会特別講演者4名のうち3名が決定、日本の渡辺武氏 (日米欧委員会委員長) がその1人となった。Congress group が決定された。



京都大学シンボルマーク

大会勧告案の起草委員会が発足、Sundberg 教授を委員長とし、浅川氏を含め 5 名編成となった。

1981 年 3 月には、Liese 会長及び本部事務局長 O.

日本の組織委員会で作られた、今後のスケジュールが同意された。出来るだけ多くの途上国研究者の出席が可能となるような財源問題が話し合われ、50 名程度を目標とすることになった。

大会勧告案の起草委員会

Bein 氏が来日、京都会場において大会運営についての具体的な打合せを行なった。

第 6 回理事会は 4 月に事務局のあるウィーンで開催され、大会に向けての最終的打合わせ、ユフロ学術賞選考などが主な議題となった。

第 7 回理事会は、大会直前、筑波と京都で連続して行なわれ、主に評議会提出議題についてのツメを行なった。

かくして、日本のユフロメンバー全員の連繋、および、林野庁、林業協会等の心からの応援を得て、ユフロ日本大会が準備された。

あとは、大会の成功を祈るばかりであった。

## 『ユフロの歴史』を終えるに当たって

連載『ユフロの歴史』は J ニュース No. 40, 41, 42 と続き、今回を以って終了する。当初は 1981 年京都での世界大会の会議内容、事後処理までを考えていたが、京都大会の内容が余りに膨大であるため、その準備段階までで一応の結末をつけることとした。今後多数の分担

執筆により京都大会を省みる企画が組まれることを期待する。

最後に、お忙しいなかをご執筆賜った坂口勝美、佐藤大七郎、松井光瑠の諸先生に厚く御礼申しあげる。

(小林富士雄)

## ユフロ 100 年記念大会について

ユフロ 100 年記念大会については、前号 No. 43 の詳しい報告で理解された事と思いますが、先に配布された第 1 次サーキュラー（予備登録フォームが刷り込まれている）で明らかになった代表講演のテーマの概略と、見学旅行の内容等について紹介します。

8 月 31 日 午後の半日旅行のコース群は次の通り。

収獲量実験プロット、産地試験、生態系研究、特異景観、エベルスバルデ森林・木材研究センター、歴史的林業地。

9 月 1 日 代表講演会のテーマは次の通り。

持続的収獲の原理、森林科学と林業研究の発展、木材利用の進歩、森林作業の進歩、適地林業、人工林施業（植林）、森林への脅威。

### 1. ドイツ国内旅行

#### (1 日旅行)

- 1) 広葉樹適地造林。
- 2) 自然条件下の松の集約管理。
- 3) 劣化松林の生態的推移。
- 4) 外来樹種の植林。

### 5) 林木育種と繁殖。

### 6) エベルスバルト森林、木材研究センター。

### 7) ベルリン-ポツダム周辺都市の林業。

### 8) 景観保護、採鉱地の森林再生。

#### (3 日間旅行)

### 9) ターラントの教育、研究施設、オレ山地のスプルース林分管理と森林被害。

### 10) 木材加工。

### 11) 高地、丘陵地林業（ハルツ山地、チューリングア、ヘッセ、低地サキソニイ）。

### 12) 森林生態系研究（エベルスバルト、ターラント）。

### 13) リューゲン島までの東北ドイツの森林と景観保護。

### 2. 国際旅行（日程は 6 日間）

#### A: ベルリン、チューリングア/ヘッセ/ババリア/バーデン-ビュルテンベルグ-チューリッヒ（スイス）

#### B: ベルリン-ドレスデン/ターラント-ブラーグ、（CSFR）ソプロン（ハンガリー）-ウィーン（オーストリア）

#### C: ベルリン-ポズナン/コルニーク（ポーランド）-南



ポーランド-オレ山地-ドレスデン (ドイツ)

(このコースは主に Div. 2 のため)

### 3. 大会前旅行

ナンシー-ベルリン (8月30日終了)

(このコースは Div. 5 のため)

記念大会登録料は約 250 DM であるが、35才以下の研究者と途上国からの参加者は約 150 DM となる予定。

ポスター展示は部会日程に関連して行われる予定。同伴者向きプログラムも計画中。短い旅行コースは複数希望に応えるため、期間中繰りかえし実施可能。第2次サーキュラーは10月中に発送する予定。

なお、No. 43 にて報告したようにユフロ-Jとして、この大会参加者への助成を行うことが決っています。  
(事務局)

## ◀研究集会などのお知らせ▶

以下の案内はすべてユフロ 100 年記念大会、およびこれに先立って開かれる第5部大会 (8月23日~28日) の期間中に開かれるセッションにかかわるものです。研究集会のお知らせ、および予定では、これまで本誌で案内されなかったものについては、締切期限が過ぎたものについても掲載してあります。

### OS 1. 03-00 (環境の影響)

ボランティアペーパーと、ポスター、テーマは森林の気象と水文、地球の気候変化が林業に及ぼす影響。

申込締切9月30日まで下記へ。

Assoc. Prof. Kurth L, Perttu Swedish University of Agricultural Sciences Department of Ecology and Environment Research Section of Biogeophysics.

### OS 1. 04-00 (自然災害)

発表を募集、ポスターも可。テーマ: 1. 地すべりと急流浸食 2. 雪積となだれ 3. 流域管理による自然災害制御。申込は10月30日まで、要約論文の締切は12月31日、送り先は下記へ。

R.R. Ziemer USDA Forest Service, Redwood Sciences Laboratory, 1700 Bayview Drive. Arcata CA 95521, USA

### OS. 5. 04-10 (人員配置と業務設計・旧生産システム)

ボランティアペーパーとポスターの標題は11月末まで、要約論文は明春3月31日まで下記へ。

Rolf Birleland Professor/Director The Norwegian Institute of Wood Technology

### OS 5. 04-11 (木質複合製品)

複合化技術の革新と新製品開発をテーマにしたボランティアペーパー、ポスターを募集。

標題は11月30日まで、要約論文は明春3月31日まで下記へ。

John A. Youngquist USDA Forest Service F.P.L One Gifford Pinchot Drive Madison, Wisconsin 53705 USA

### OS 5. 02 (木材工学), S 5. 01-05 (最終用途が求める木材の性質)

合同セッションへのボランティアペーパーを募集。

標題は10月31日まで下記へ。

Dr. Robert Ethington Department of Forest Products Forest Research Laboratory 105 Corvallis, OR 97331-5709, USA

Tel. 01-503-737-4224

Fax (01-503-737-3385) および

Dr. Preben Hoffmeyer Technical University of Denmark Building Materials Labo. Bygning 118. DK-2800 Lyngby Denmark

Tel. 45-4593-4331 Fax (45-4288-6753)

### OS 6. 06-00 (森林研究の管理)

テーマ『1990年代の研究管理』についての論文募集。申込は10月31日まで下記へ。

Mr. Dave Kill-Regional Director General Northern Forestry Centre-Forestry Canada 5320-122nd Street Edmonton, Alberta Canada T6H 385

Tel. 403-435-7202 Fax (403-435-7369)

## これからの研究集会予定 (IUFRO News Vol. 20 No. 2 より)

**百年祭**

IUFRO : IUFRO Centennial (ユフロ百年祭) / 31 Aug.- 6 Sep. 1992, Eberswalde/Berlin, Germany.

**世界大会**

IUFRO, Finish Forest Research Institute, Ministry of Agriculture and Forestry, Academy of Finland : XXth IUFRO World Congress (第20回ユフロ世界大会) / 7-12 Aug. 1995, Tampere, Finland.

**Division 1**

S1.01-06 (熱帯・亜熱帯森林生態系) : Application of Science to Forest Conservation (森林保全への科学の適用) / 25 Sep. 1991, Paris, France.

S1.02-00 (立地) : Technical session "100 Years Research in Forest Ecology-Problems of the Past, Today and in Future" (研究集会 "森林生態学研究 100年-過去、現在、未来の問題点" / 2-3 Sep. 1992, Eberswalde, Germany.

**Division 2**

Division 2 (森林植物と森林保護) : Inter-Divisional Symposium on Non-Wood Forest Products (部会間シンポジウム 非木材森林生産物) / Mar. 1992, Taipei, China.

S2.02-22 (Quercus の遺伝学) : Genetics of Oak Species (オークの遺伝学) / 2-6 Sep. 1991, Nogent-sur-Vernisson, France.

S2.04-05 (生化学遺伝学) : Population Genetics of Forest Trees (森林樹木の個体群遺伝学) / 25-28 Aug. 1992, Bordeaux, France.

S2.04-07 (体細胞遺伝学) : Forest Research Institute 3rd International Workshop on Trends in the Biotechnology of Woody Plants (森林研究所第3回国際ワークショップ 木本植物のバイオテクノロジーの現状) / 25-29 Nov. 1991, Dehra Dun, Uttar Pradesh, India.

S2.06-01 Root and Butt Rot (根腐れ病と根株腐朽病) : Martin Johansson, Dept. of For. Micol. and Pathol., Swedish Univ. of Agri. Sci., Box 7026, S-750 07 Uppsala Sweden / 1993年8月9-16日 ウブサラ、スウェーデン、エクスカーション、フィンランド。

S2.06-06 Vascular Wilt Diseases (導管病) ; S2.06-13 Complex Diseases (複合病) : カン衰退研究の最近の進歩に関する国際学会、Prof. Nicola Luisi, Dipartimento di Patologia Vegetale, Università, Via Amendola, 165/A, I-70126 Bari, Italy / 1992年9月、バリ、イタリア。

S2.07-01 Cone and Seed Insects (球果・種子害虫) : 第19回国際昆虫学会 (ICE) と同時開催、北京、Alain Roques, Chairman, INRA-CRF Orleans, Station de Zoologie Forestiere, Ardon, F-45160 Olivet, France / 1992年6月28日-7月4日、ハルビンか北京。

S2.07-06 (森林昆の個体群動態) : The Role of Stress in the Population Dynamics of Forest Pest Insects (with special reference to air pollution) (大気汚染に関連する森林害虫の個体群動態におけるストレスの役割) / 16-21 Sep. 1991, Zakopane, Poland.

S2.07-10 Forest Protection in Northeast Asia (北東アジアの森林保護) : 北東アジアにおける森林昆虫の最近の進歩、金光桂二教授、名古屋大学 / 1992年6月上旬、北京、中国。

P2.02-00 (早生樹種造林の生産力), P2.02-01 (ユーカリの生産力), P2.02-02 (針葉樹の生産力), AFOCEL : Mass Production Technology for Genetically Improved Forest Tree Species (遺伝学的に改良された樹種のための大量生産技術) / 14-18 Sep. 1992, Bordeaux, France.

P2.05-00 (大気汚染の森林生態系に与える影響), P2.05-03 (生化学的・生理学的側面) : Air Pollution and Interaction Between Organisms in Forest Ecosystems (大気汚染と森林生態系の生物間相互作用) / 9-11 Sep. 1992, Tharandt/Dresden, Germany.

**Division 3**

S3.06-00 (山岳林森林作業), S3.05-00 (熱帯における森林作業) : Computer Supported Planning of Roads and Harvesting in Mountainous Forests (山岳林における林道と収穫計画へのコンピューターの起用) / 31 Aug. - 5 Sep. 1992, Eberswalde, Germany.

S3.05-00 (熱帯における森林作業) : Forest Operations Research for Tropical Countries (熱帯諸国のための森林作業研究) / 1993(possibly April), Southeast Asia.

S3.06-00 (山岳林森林作業), S3.05-00 (熱帯における森林作業), Pakistan Forest Research Institute : Improving Planning, Road Building, and Harvesting Methods in the Himalayan Region (ヒマラヤ地域における計画、道路建設、収穫方法の改善) / Spring 1994, Peshawar, Pakistan.

P3.03-00 (労働科学), Ergonomic commissions of the Commission Internationale du Génie Rural; International Association of Agricultural Medicine and Rural Health : XIth Joint Ergonomic Symposium on "Psycho-Social Factors Affecting Work in Agriculture and Forestry" (第11回労働科学合同シンポジウム "農業と林業作業への社会心理的要

素の影響” ) / 5-7, Aug. 1991, Norway.

P3.06-00 (間材の経済と収穫) : Sep. 1992, Hungary.

#### Division 4

S4.01-00 (測定、成長・収穫量), S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング), the Australian Forestry Council, Australian National University, ANUTECH Pty. Ltd. : Integrating Forest Information Over Space and Time (空間的・時間的総合森林情報) / 13-17 Jan. 1992, (new date), Canberra, ACT, Australia.

S4.01-00 (測定、成長・収穫量), S4.01-03 (試験の計画、実行、評価), S4.01-04 (樹木・林分の成長シミュレーション・モデル), S4.01-06 (森林計測の器具と方法), S4.01-07 (林分動態モデルの設計、実行、評価) : Long-term Experimental Sample Plots with Emphasis on Mixed Stand : Planning, Performance, Results (特に混交林分のための長期試験サンプルプロット : 計画、実行、結果) / 2-5 Sep. 1992, Berlin Eberswalde, Germany.

S4.01-04 (樹木・林分の成長シミュレーション・モデル) : Growth Models for Policy Making (政策立案のための成長モデル) / (予定) early Oct. 1994, Prague, Czechoslovakia.

S4.01-00 (測定、成長・収穫量), S4.02-00 (森林資源調査), S3.06-00 (山岳林森林作業), S3.04-02 (作業研究 ; 支出、労働生産性) : Integrated Decision-Making in Planning & Control of Forest Operations (森林作業の計画と管理における総合決定) / 27-31 Jan. 1992, Christchurch, New Zealand.

S4.02-01 (熱帯における資源データ) : Global Climate Change and the Tropical Rainforests (地球的气候変動と熱帯降雨林) / 1992, Ibadan, Nigeria.

S4.02-05 (リモートセンシングと地球森林モニタリング), Kasetsart University, RFD, NRCT, Thai Forestry Sector Master Plan, University of Joensuu, FINNIDA : Workshop on Remote Sensing and World Forest Monitoring (リモートセンシングと世界森林モニタリングのワークショップ) / 13-17 Jan. 1992, Bangkok, Thailand.

S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング), Finnish Ministry of Agriculture and Forestry, Academy of Finland, University of Helsinki, Finnish Forest Research Institute : Ilvessalo Symposium: National Forest Inventories (Ilvessalo シンポジウム : 全国森林資源調査) / 17-21 Aug. 1992, Helsinki, Finland.

S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング) : History of Sampling, Data Collection and Remote Sensing for Resource Inventory and Monitoring, and Outlook on the future (資源調査とモニタリングのためのサンプリング、データ収集、リモセンの歴史そして将来予測) / 31 Aug.- 5 Sep. 1992, Eberswalde/Berlin, Germany.

S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング), the Society of American Foresters, the International Society of Tropical Foresters, the Western Forestry and Conservation Association, the World Forestry Institute : Stand Inventory Technologies (林分資源調査技術) / 14-18 Sep. 1992, World Forestry Center, Portland, Oregon, USA.

S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング) : Minimum Data Requirements for Sustainable Forest Management (持続的森林経営のための最小必要データ) / Spring 1993, Oxford, U.K.

S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング), International Society of Tropical Foresters, Society of American Foresters' Inventory Working Group : Inventorying and Monitoring Techniques to Respond to Catastrophic Events (大被害に対応する資源調査とモニタリングの技術) / 21-25 Jun. 1993, University Park, Pennsylvania.

S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング), S4.04-00 (森林経営計画・経営経済学), S4.07-00 (森林の社会的・経済的側面) : Advancement in Forest Inventory and Forest Management Sciences (森林資源調査と森林経営科学の進歩) / Sep. 1993, University Park, Pennsylvania.

S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング) : Data Availability and Analysis for the Tropical Moist Forest Region (熱帯湿潤林のためのデータ入手と分析) / Autumn 1993, West Africa.

S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング), The society of American Foresters : Inventory and Management of the Boreal Forests (北方林の資源調査と経営) / Summer 1994, Anchorage, Alaska.

S4.02-01 (熱帯における資源データ) : Resource Inventory Techniques to Support Agroforestry Activities (アグロフォレストリー活動を支援する資源調査技術) / 1993, Palampur, Himachal Pradesh, India.

S4.11-00 (formerly S6.02-00) (統計、数学、コンピューター) : Planning and Evaluation of Experiments (試験の計画と評価) / 10-14 Sep. 1991, London, U.K.

#### Division 5

Division 5 (林産), ARBOROR : All-Division 5 Conference; Better Wood Products Through Science (全第5部会集會 ; 科学を通じてよりよい木材製品を) / 23-29 Aug. 1992, Nancy France.

S5.01-01 (木材形成) : (1) Radial and Axial Differentiation in Wood. (木材の軸方向と放射方向の差異) (2) Cambial Activity and Development of Xylem and Phloem in Trees. (形成(層)活動と木部、篩部の発達) / 23-29 Aug. 1992, Nancy, France.

S5.01-02 (材質の自然変動): Wood Quality Variation in Endemic Tropical Species (熱帯郷土樹種の材質変動) / 23-29 Aug. 1992, Nancy, France.

S5.01-04 (木材特性の生物的改質): Connections between Silviculture, Wood Quality Modelling and Simulation; Software Development (造林と材質モデルシミュレーションの連携: ソフトウェアの開発) / 23-29 Aug. 1992, Nancy, France.

S5.01-05 (最終用途に望まれる木材の性質), S5.02-00 (木材工学): Wood Quality Needed for Advanced Structural Products (進歩した構造製品に求められる材質) / 23-29 Aug. 1992, Nancy, France.

S5.03-04 (木材防火): Wood Burning '92 (木材燃焼'92) / 1-5 Jun. 1992, The High Tatras, Hotel Patria.

P5.05-00 (年輪解析): New Techniques in Tree Ring Analysis, Presentation of new technical developments in dendrochronology, e.g. ring-width measurement, density analysis (X-ray densitometry, coring resistance), pointer years, image analysis, analysis of chemical components (heavy metals, isotopes), sandblast techniques (年輪、年代学の新聞発掘技術の数々) / 23-29 Aug. 1992, Nancy, France.

P5.05-00 (年輪解析): 6th International Dendro-Ecological Field Week (第6回年輪環境学野外週間) Aims: Studying extreme ecological influences on tree growth. Practical exercises with trees in different subalpine and montane environments. / 25-31 Aug. 1991, Brambrüesch near Chur, Switzerland.

#### Division 6

S6.06-00 (森林研究の管理), S6.06-03 (応用) (formerly S6.08-00 Applying Results of Forestry Research): Forestry Research Management Initiatives for the 1990s (agenda: the New Zealand experience in science and forestry reforms; forest research funding; evaluation of research; strategic planning; technology transfer; internationalization of forestry research, linkages with CGIAR) (1990年代のための林業研究管理の先導) / 7-11 Oct. 1991, Rotorua, New Zealand.

S6.12-03 (組織的土地利用と林政): Evolution of Land Use During the Last Century-What Does It Presage for the Future? (この一世紀の土地利用評価は将来をどう予言するか) / 30 Aug.-5 Sep. 1992, (at the Centennial Meeting) Eberswalde/Berlin, Germany.

#### Division 4 & Division 6

Division 4 (資源調査、成長、収穫量、経営システム) and Division 6 (社会・経済情報システム、政策科学), All-Union Research Institute for Silviculture and Mechanization of Forestry (VNILM): Forest Management Under Market Conditions (市場条件下の林業経営) / Week of 23-29 Aug. 1992, immediately before the Eberswalde Centennial Meeting Pushkino, Moscow Region, USSR.

詳しい内容、連絡先等は IUFRO News Vol.20 No.2 を参照のこと。(〈Division 2 樹病・害虫関係〉田村弘忠、〈その他〉事務局)

### ユフロ-J 会務の引継ぎについて

先般、森林総合研究所長、小林富士雄氏のご退職により、勝田征氏が新たに所長に就任されました。これに伴いユフロ-Jの会務を小林氏から勝田氏に引継ぐことにつきまして、この度、幹事機関のご了承を頂きました。次回の機関代表者会議にて正式に議長としてご承認いただく予定ですが、各機関、並びに会員各位のご了承をお願いいたします。

(事務局)

### 会費納入のご案内

今年度(1991.4.1~1992.3.31)のユフロ-J会費の納入を受付けています。納入方法はこれまでと変わりません。B会員機関で請求書が必要な場合は、書式等を含めてお知らせ願います。振込口座は次の通りです。

○銀行送金: 関東銀行牛久支店 普通口座 697583  
IUFRO-J (ユフロジェイ) 勝田 征

○郵便振替: 東京 9-159224 IUFRO-J 事務局

(郵便振替の場合は、指定用紙の利用により払込料は無料)

IUFRO-J NEWS No. 44

平成3年11月20日

編集・発行: 国際林業研究機関連合

日本委員会事務局